

Title	伝小倉公脩筆『古今和歌集』零本：解題と翻刻
Sub Title	Bibliographical introduction and reprint of the odd volume Kokinwakashu attributed to the hand of Ogura Koshu
Author	川上, 新一郎(Kawakami, Shinichiro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1998
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.33 (1998.) ,p.271- 320
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000033-0271

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

伝小倉公脩筆『古今和歌集』零本 解題と翻刻

川上新一郎

はじめに

ここに紹介翻刻する伝小倉公脩筆『古今和歌集』零本一帖は平成八年古典籍下見展観入札会に出品されたもので、現在は家蔵となっている。恋部卷十一から十五までの零本であるが、定家本とは異なり、西脇家蔵飛鳥井雅経筆本¹と同系統の本文を有している。また、本文を検討すると雅経筆本の転写本とも考え難く、新院御本の本文を考える上でも一資料となりうる。

以下はその解題と翻刻である。

古今和歌集存卷十一―十五

〔鎌倉末〕写・伝小倉公脩筆

一帖

綴葉装。表紙欠。現在、見返しに貼込まれていた遊紙が、前後の表紙代りになっている（二三・六×一六・六糎）。表紙に後人の書入れがあり、中央に「紙数七拾五枚」、左肩に「小倉殿公脩筆」とそれぞれ打付書する他、右肩に貼紙し「小倉殿公脩／ハシタ本□□不足」等と墨書する。極札の類はない。料紙、斐楮交漉紙。墨付、七五丁（詳細後述）。遊紙、前一丁、後なし。字面高さ、約一九・〇糎。每半葉七行（時に八行、稀に九行）、和歌二行書。内題「古今和歌集卷第十一（一十五） 恋部一（一五）」と部立までを一行書とする。ただし、卷十五は「卷」を欠き、恋部の三より五は「哥」を用いる。零本で巻末を欠くため奥書識語の類はなく、裏表紙代りの一紙の表左下に

「すみ付七十五枚」とある。朱点による声点が付されるが、清濁を示すのみで、文字の左に一点注記（清音）もしくは二点注記（濁音）が施される。後述するように、本書には後人による定家本との校合書入がなされているが、あるいは声点も後人の所為かと疑われる。

本書は卷十一より十五までの恋部を完存する他、卷二十、1091-1099上句を含む一葉が中途に誤って綴込まれている。以下説明を加える。本書は五折からなり、第一折より第四折は各九枚十八丁よりなっている。第一折の最初の二丁は本来表紙見返しにあつたと思われ、現在は表紙代り、第二丁は遊紙で、第三丁表より本文となつている。第五折は六丁からなるが、第一丁と第六丁（現裏表紙）、第四丁と第五丁が対応しており、第二、第三丁は対応する丁がなく、第三丁が誤綴された卷二十の一葉である。また、第三丁を外すと本文は欠落なく連続する。従つて本来第五折は三枚六丁よりなり、第二丁に対応する一丁が現在の第五丁の次に遊紙として存在し、次の第六丁は裏表紙見返しに貼込まれていたと考えられる。

すると、本書は古今集を四分冊した第三冊に当り、元はこれだけで一冊に装訂されていたことにならう。

書写年代は鎌倉末もしくは南北朝初と思われ、伝称筆者である小倉公脩（三盞一三三七）の年代と矛盾するものではないが、もとよりその証はない。²⁾

全巻一筆であるが、他に後人による定家本との校合書入がかなり詳細に施され、本来存在したと思われる傍書と弁別し難い箇所があり、書写面は錯綜している。また、後人書入も一回一筆限りとも断定出来ず、原態の推定に迷うところがある（後人書入は室町期であろう）。従つて、検討の対象となる本文は本行及び初めから存したとみられる若干の傍書ということになる。

まず注目すべきは、内題が部立まで一行に書かれていることである。この点は以前にもふれたが、定家本（俊成本も）は部立を改行する形式をとるため、一行書形式は非定家本の可能性が高い。本書も校合してみると、定家本でないことが判明する。排列を見ると、異本歌はなく、次の異同がある。

こまち

797 いろみえてうつろふ物はよの中の

人のこゝろのはなにそありける

よみ人しらす

800 いまはとてきみかくれなはわかやとの

花をはひとり見てやしのはん

むねゆきのあそん

801 わすれくさかれもやするとつれもなき

人のこゝろにしもおかなん

よみ人不知

798 我のみやよをうの花となきわひん

人のこゝろのはなとちりなは

そせいほうし

799 おもふともかれなん人をいか、せん

あかすちりぬる花とこそみめ

寛平御時御屏風に哥か、せ給ける

ときよみける

そせい

802 わすれくさなにかたねとおもひしは

つれなき人のこゝろなりけり

(傍書省略)

この排列をとるのは雅経筆本のみである。雅経筆本には次の

ごとくある。

歌次第イ本モ如此(朱)

こまち

797 ^(一朱)いろみえてうつろふものはよのなかの人のこゝろのはなにそ

^(サリケルイ朱)ありける

よみひとしらす

800 ^(四朱)いまはとてきみかくれなはわかやとのはなをはひとりみてや

しのはん

むねゆきのあそん

801 ^(五朱)わすれくさかれもやするとつれもなき人のこゝろにしはお

^(クトモイ朱)かなん

よみひとしらす

798 ^(二朱)われのみやよをうのはなとなきわひむ人のこゝろのはなとち

りなは

そせいほうし

799 ^(三朱)おもふともかれなんひとをいか、せむあかすちりぬるはなと

こそみめ

寛平御時御屏風に歌か、せたまひけるとときよみける ^(テカキケルイ朱)

そせい

802 わすれくさなにかたつねとおもひしはつれなき人のこゝろ
なりけり

これによれば雅経筆本は797 800 801 798 799 802の排列をとり、朱にて通常の排列に改め、更に「歌次第イ本モ如此」と注記している。「イ本」とは清輔本であることが奥書により明らかで、本文校合の結果もそれを裏付けている。

この箇所の雅経筆本の排列と注記について、久曾神氏は「それは「七九八」「八〇〇」が共に読人不知である為書誤つたのであり、その順序を歌の上に記して訂正してゐる。」（久曾神氏前著37頁）と述べられている。797の次に800 801の二首を挿入する排列は他に例を見ないものであるので、単純な誤りに起因する可能性が高い。しかし、さればと言って雅経筆本が書写の際目移り等で誤り、すぐ気付いて朱注したものではない。

なぜなら、小松氏著書に掲げられた書影によれば、雅経筆本は朱墨で書かれているのではなく、底本の朱書を「本ハ朱ニテ付タリ」のように墨注記で示しており、朱は用いられていないからである。この点は久曾神氏前著凡例にも「祖本に朱書たりし旨、原本に明記せられたるところは、すべて太字を用ゐたり。」

と明らかにされている。つまり、797-802の排列が仮に単純なる書誤りによるものとしても、それは雅経筆本が犯したものでなく、その底本にもそうなっており、排列訂正の朱注も既に施されていたと考えるべきであろう。このことは、雅経筆本の訂正前の排列を有する本が一段階前に少なくとも一本存在したことを意味する。

そして今回、訂正の注記のない同排列の伝本の出現により、この排列が、結局は書写の誤りによるものとしても、書写して直ちに誤りに気付いて訂正注記したという単純なものでなかった可能性も生じよう。

それは延いては、伝小倉公脩筆本が雅経筆本の転写本でない可能性をも示唆しえよう。雅経筆本が転写をくり返せば、通常の排列に改められてしまうか、さもなくば注記を保存するのが普通と考えられるからである。もちろんそれは蓋然性の問題にすぎず、転写本である可能性を否定するものではない。

さて、次に字句の異同である。既に797-802の箇所にも伝公脩筆本は定家本と異なる点がある。上段が伝公脩筆本、下段が定家本である。

797 こまちー小野小町

800 きみかくれなは―君か、れなは

798 よをうの花と―世をうくひすと

802 よみける―よみてかきける

同 そせい―そせい法し

また、そのことごとくが雅経筆本と一致している。中でも、

「きみかくれなは」「よをうの花と」「よみける」は本書と雅経筆本のみの共通異文である。

以下、本書が定家本と異なり雅経筆本と一致する例を挙げる。

本書は本行のみをとり、見せ消ち、補入等の二次的本文は一切無視し、雅経筆本も本行のみを対象とする。上段が本書、下段が定家本である。

473 人をまつかな―年をふる哉、476 さこん―右近、478 かすかのまつりのつかひに―かすかのまつりに、同 をひてくる―おひいてくる、482 あふことのくものはるかに―逢事はくもるはるかに、484 ゆふくれの―夕くれは、同 ひとこふるみは―人をこふとて、487 かけぬひそなき―かけぬ日はなし、489 こひぬ日そなき―こひぬ日はなし、493 なそわか恋の―なとわかこひの、508 ものおもふころを―物思ころそ、510 くるしくのみや―くるしとのみや、512 たねしあらは―

たねしあらは、516 かたしらす―方もなし、同 いかねし

かは―いかにねし夜か、526 ゆめにみゆるは―夢に見えつ、

528 そはぬものから―そはぬ物ゆへ、529 あらぬものから―

あらぬわか身の、530 かなしきは―わひしきは、539 こたえ

ぬそらは―こたへぬ山は、549 恋をせさらん―こひすしもあ

らむ、551 けぬかといはん―けぬとかいはむ、556 真せいか―

真せい法しの、564 わひしかりける―こひしかりける、568

こ、ろみん―心見に、同 あはんてはなん―あはむといはな

む、569 ゆめてふものそ―夢といふ物ぞ、572 色はれなまし―

色もえなまし、578 ものやわひしき―物やかなしき、584 い

ふ人もなし―いふ人のなき、587 つねよりもなをふかきわか

恋―つねよりことにまさるわかこひ、592 たきつせのねさし

とまらぬ―たきつせにねさしと、めぬ、606 われのみそきく―

我のみそしる、607 したになかれて―したにかよひて、616

つひたちに―つひたちより、同 ものいひて―ものらいひて、

617 ふちはらのとしゆきの朝臣―としゆきの朝臣、621 きへ

ぬへき哉―けぬへき物を、同 かきのもとの人丸か也―柿本

人麿か哥也、622 あき、りに―秋の、に、627 あふことにな

き―逢事なきに、631 またきなきなは―又もなきなは、632

まもらせければ―まもらすれば、同 かへりきて―かへりて、
635 こまち―をの、こまち、同 あきのよは―秋の夜も、644
人にあひてのあしたに―人にあひてあしたに、645 伊勢
のくに、かりのつかひにまかりける時―伊勢のくに、まかり
たりける時、646 こよひさためよ―世人さためよ、649 わ
かなもた、し―わかかなもたてし、652 したにやおもへ―した
におもへ、653 したゆふそての―したゆふひもの、656 さ
こそはあらめ―さもこそあらめ、同 みるかすへなさ―見る
かわひしき、657 おもひのまにま―思ひのま、に、同 ゆめ
ちをさへは人もとかめし―ゆめちをさへに人はとかめし、668
色にいてぬへく―色にいてぬへし、669 こきてなん―こき
いてなむ、670 さたふん―平貞文、680 もゆるわか身を―も
ゆるわかこひ、692 つけやらん―つけやは、695 かきねに
さける―かきほにさける、699 われこひめやは―わかこひめ
やは、702 あふみのうねへに―あふみのうねめに、703 かへ
しにたてまつりける―返しによみてたてまつりけるとなむ、
706 女―ある女の、同 つかはせりける―つかはしける、同
とまらねは―なりぬれば、708 すまのうらに―すまのあま
の、709 みえぬれば―なりぬれば、710 た、こ、にのみ―た、

こ、にしも、714 そせい―素性法師、717 わずれなめ―、な
れなめ、722 そせい―そせい法し、同 うはなみはたて―あ
たなみはたて、731 ふるひとみれはそてそひちぬる―ふる日
となれはそてそぬれぬる、733 あはにうきなん―あわとうき
なむ、734 むか。へに―いにしへに、735 人はしらすや―人
しるらめや、737 こむ院のおほいまうちきみ―近院の右のお
ほいまうちきみ、740 侍けるときに―侍ける時、742 こと
つてのなき―ことつてもなし、747 とうかあまりはかりにな
ん―とをかあまりになむ、同、もひいて、―こひて、同
よめりける―よめる、754 めならふ色の―めならふ人の、同
わすられにけん―わすられぬ覧、755 おひてみたる、―お
ひて流る、761 われそかすかくきみかこぬ夜は―君かこぬ夜
は我そかすかく、767 われやいをぬる―我やいをぬぬ、769
なかむるやとの―なかめふるやの、770 僧正へせう―僧正へ
んせう、773 わひしきものを―わひにし物を、784 よみてお
くりける―よみてつかはしける、789 たち花のたかつねの朝
臣むすめ―藤原高経朝臣女、同 ふもとよりのみかへりきぬ―
ふもとを見てそかへりにし、791 ものへまかりければのちに―
ものへまかりけるみちに、800 きみかくれなは―君か、れな

は、798 よをうの花と一世をうくひすと、802 よみけるーよ
みてかきける、同 そせいーそせい法し、803 けんけいほう
しーナシ、同 なにをうしとてー何をうしとか、804 つらゆ
きーきのつらゆき、807 人はうらみしー世をはうらみし、808
もとよしのおほきみのむすめーもとよのおほきみの女、812 い
とんたえぬるーもはらたえぬる、814 人そなきー方そなき、
1073 しつは山ーしはつ山、1074 かみのみむろにー神のみまへ
に、1076 人もみるかねー人も見るかに

本書が雅経筆本と異なる例をまだ示していないので、これだ
けでは決定的な証拠とは言えないかもしれないが、雅経筆本の
みとの共通異文も多く、本文の類似は疑いようもない。

本稿の主題ではないが、この異同の多さを見るにつけ、同じ
新院御本を祖本とし、さして転々と書写された訳でもないにか
かわらず、雅経筆本と定家本はあまりに違いすぎていると思わ
ざるをえない。定家による校訂を考慮しても、右の異同の多く
がそれであるとは到底思われず、また、定家本を俊成本に置き
換えても、右の結果にさしたる違いはないのであるから、不審
という他ない。

ただ、雅経筆本には清輔本との校異以外に傍記本文がかなり

存在し、それが定家本に一致する例は少なからずあるので、そ
の辺りが解決の鍵なのかもしれない。伝小倉公脩筆本にも後人
の所為とは思われぬ傍記本文がままあり、その傍記本文は必ず
しも雅経筆本と一致しないが、何がしか新院御本の書写状況を
うかがわせるものがありそうである。

次に伝公脩筆本が雅経筆本と異なり、定家本と一致する例を
挙げる。上段が本書、下段が雅経筆本で、傍書等を見無視するの
は同様である。

479 恋しかりけれーさひしかりけり、562 ゆふされはーゆふ
さりは、575 そせいほうしーそせい、609 みはてぬゆめのー
みはてぬゆめを、663 色にいてめやーいやにいてめやは、709

はふきあまたにーはふきのあまたに、720 こゝろあるとやー
こゝろあるにや、同 この哥ーこのうたの、同 あつま人ー
あつまつ、747 もとのみにしてーおなしみにして、757 あき
ならてーあきならず、787 そらになる覧ーそらにちるらん、
802 なにをかたねとーなにをかたつねと、817 あらをたをー
あらをたに、1076 まきもくのーまきもくきの

以上のごとく数もすくなく、その中には雅経筆本の明らかな
誤りとみなされる箇所もあり、雅経筆本の傍書と一致する例も

多く、大きな異同はないとして誤りない。

次に、伝公脩筆本が定家本、雅経筆本のいずれとも一致しない例を挙げる。その中には、本書の明らかな誤脱も含まれるので、それらをまず列挙する。それらの多くは、見せ消ち、補入等により本文が正されているが、ほとんどが定家本と校合した後人の所為とみなされるので、補訂は採用せず誤りとして掲げる。

520 はやなりなんみのまへに、540 かたらは、556 ことはを
たによみて、562 もれとん、564 きえかりてそ、577 ひちに
しかも、594 おもひめけん、603 つねきものと、614 あらて
としふる、623 あしたゆく覧、645 あしたにまた、同 をり
けあひたに、676 ちりならなの、703 たんとおもふな、709
たえぬことの、731 はるのひの、743 なかめちるらん、749
藤原のかけすけの朝臣、781 のかせをさむ、783 「かへし」
ナシ、808 とくるひもしかな、824 よみひとしす、1073 かさ
しゆくのしまこきかくる

以上、誤脱の箇所が多いようにも思われるが、補訂の中には同筆かと疑われるものもあり、必ずしも誤りが多いとは言えない（詳細は翻刻の注記を参照されたい）。

右を除いて、本書が定家本、雅経筆本いずれとも異なる例を挙げる。上段が本書、下段が雅経筆本で、定家本、雅経筆本が一致している場合は、末尾に*を付す。

参考のため、久曾神昇氏『古今和歌集成立論』により本書と本文が一致する主要な伝本を検索し、括弧内に略号で掲げる。なお、伝公任筆本は小松茂美氏編『伝藤原公任筆古今和歌集』（平7刊）による。使用する略号は以下の通りである。

大江切（江）、志香須賀文庫蔵花山法皇御本（花）、基俊本（基）、校合が一致する場合のみ）、筋切（筋）、元永本（元）、唐紙卷子本（唐）、関戸家本（関）、雅俗山庄本（俗）、志香須賀文庫蔵伝後鳥羽天皇宸筆模写本（後）、今城切（今）、俊成建久二年本（建）、寂恵本（恵）、中山切（中）、伝公任筆本（公）
清輔本共通（清）、六条家本（六）、天理図書館蔵片仮名零本（零）、寛親本（静）、宮本家本（宮）、尊経閣本（尊）、伏見宮旧蔵一本（伏一）、伝顕昭筆本（伏）、天理図書館蔵伝家隆筆本（天）

471 いはなみはやくーいはなみたかく*、476 こひしきは

(花基元唐、中「こひしくは、」六「こひしきは」) — こひしくは *、479 よみて (宮) — のちによみて *、481 ものおもふかな (花元今中六宮尊) — ものをおもふかな *、500 したもえにせん (花基惠六宮尊、中「したもえにせん」) — したもえをせん *、511 なかみなかみを — なにみなかみを *、525 たのめつ、(尊) — たのみつ、*、548 ほのうへてらす (花元俗今中清) — ほのうへてらす *、549 などかほにて、(元) — などかほにいて、*、580 たちあるそらも — たちあるそらも *、593 からころも (基後公) — かりころも *、596 なをこほりつ、— なをこほりけり *、612 ひこほしの (元六) — ひこほしも *、617 なりひらの家なりける — なりひらのあそんのいへなりける、637 なにそわひしき (江元唐後「なるそわひしき」) — なるそかなしき *、650 あらはれて (中六尊伏一伏天、零「アラハレテ」) — あらはれは *、669 みるめすらなし — みるめすくなし *、670 なきものを (江元唐零) — なきこひを *、687 おもひそめてし (花中天) — おもひそめてん *、694 露をもみ (静) — つゆをおもみ *、697 やまとにあらぬ — やまとにはあらぬ *、702 このうた (江花基建公六尊) — このうたは *、705 ふみつかはしける (花

公静、六「ふみつかはしける」) — ふみつかはせりける *、722 そこふかき — そこひなき *、728 みをははなれは — みをははなれす *、732 恋わたるらん (花六宮) — こひわたりなん *、733 わたつみの (公) — わたつみと *、739 まてとは、— まて、は、744 なにかせん — なにせんに *、745 ものいひける (花基俗建) — ものらいひける *、747 かくれにけるに — かくれにける *、748 ほにて、— ほにいて、*、753 くまもなくなきたるあまの — くも、なくなきたるあさの *、764 あさきこ、ろは — あさきこ、ろも *、780 なりひらの (後惠公六、建「なりひらの」) — なかひらの *、784 なりひらの朝臣の (花基) — なりひらのあそん *、788 ことくさそ — ことのはそ *、795 ものにそありける (筋元後、関公「ものになりける」) — いろにそありける *、812 ことんしりぬれ (花伏一) — こともしりけれ *、1073 しまつ山ふり — しはつやまふり *

右を見ると、大半が定家本と雅経筆本が一致している箇所のみである。このことは伝公脩筆本が転訛した本文を有すると考えられなくもないが、一々の箇所本文を見ると、独自異文もあるが、多くは他の伝本と共通異文を有するものであり、必

ずしも単純な転訛とは言えない。勿論転写をくり返す間に種々の要素を混入したとも考えられるわけで、中世の非定家本系伝本の様相を示すと言えるかもしれない。

次にこれまで具体的に触れてこなかった書入れ、校合、補訂について述べることにする。それらについては、これまでの論述では全て無視し、見せ消ちの訂正等にも一切従っていない。その理由は以下に述べる。

本書にはほぼ次の三通りの補訂が加えられている。

1、字句の補入。一見明白な脱字から、文意にかかわる数文字以上のものまである。

2、見せ消ちによる本文の抹消及び訂正。明白な書誤りの訂正から、歌句の変更にまで及ぶ。

3、本行、傍書のいずれかを見せ消ちにし、他に合点を付す。これらの書入の多くが後人の所為と認められるが、本文と同筆かと思われるものも少なからずあり、全てを弁別するのは容易でない。

また、後人の書入れも、一部は薄墨、一部は普通の墨書で全て同時かつ一筆とも言い難い。ただし、両者の間に内容的な區別は認め難い。

さて、これらの校合の意味であるが、大半が定家本との校合による本文改訂であることは明らかである。1及び2の操作によって改訂される以前が雅経筆本に一致する本文であり、改訂後が定家本本文である。更に3の場合は、合点を付された方が定家本本文となっている。

この校合作業は比較的丁寧に行われており、一部校合もれもあるが、一貫してなされている。

定家本と校合がなされている証拠は、作者にままだ定家本の作者注が書入れられていることである。つまり640「寵」に「一説ウツク、或本カク、一説チヨウ用之」、737「こむ院のおほいまうちきみ」に「能有、文徳源氏、右大臣左大将」、740詞書「中納言みなもの、ほるのあそん」に「昇、延喜八年二月中納言、九年度部卿、十四年度大納言」、769「さたの、ほる」に「貞朝臣登、備中守、仁明御子」、781「雲林あんのみこ」に「常康親王、仁明御子」、783「おの、さたき」に「貞樹」、807「ないしのすけ藤原のなをいこの朝臣」に「直子」、809「すかのた、おん」に「忠臣」とそれぞれ注記するのは「寵」の「或本カク」が出典不明である以外全て定家本との校合の結果書入れられたもので、筆跡もまた後人のものである。

3については具体的に説明すると左のごとくである。

512第三句は伝公脩筆本は「おひにけり^{ぬへし}」とあり、「おひにけり」の「に」の右肩に合点、「ぬへし」の左傍に見せ消ち符号があり、更に「おひにけり」の下に小字で「用之歟」とある。

これは、伝公脩筆本は本来「おひにけり^{ぬへし}」とあり（雅経筆本全同）、それを定家本と校合して、定家本と一致する「にけり」に合点を付し、傍書を見せ消ちし、念を入れて「おひにけり」の下に「用之歟」と注記したものと考えられる。

また、516初句は「よひ^{ゆふくれは}く^はに」とあり、「ゆふくれは」の右傍に見せ消ち符号があり、その下に「不用之歟」とある。これは定家本は「よゝゝ^はに」であるから傍書を見せ消ちし、「不用之歟」と注記したのであろう。他の例からすると、「よひく^はに」に合点すべきであるが、ここでは省略したのであろう。なお、雅経筆本は「よひ^{ゆふされは}く^はに」となっている。

他の箇所^のの検討からも、ほぼ以上の法則が認められる。従って、本書においては見せ消ち訂正や傍書等本行以外の本文は一応別途に扱うべきであり、考察の対象から除外するのが安全である。ただし、補訂や傍書が全て後人のものとは言えず、雅経筆本と比較してみると、本行、傍書が共に一致している場合が

珍しくない。しかしながら、その場合でも、必ずしも筆勢で傍書も同筆と認め難いこともあり、定家本との校合による偶然の一致とも考えられる。（本行、傍書いずれかに合点のある箇所の傍書は同筆の可能性が高い。）

結局、補訂と傍書については現段階では、確たる結論を出しえず、一々についても弁別し難いため、組版の都合もあって、本行のみを翻刻し、その他の書入れは全て注記で示すこととした。その際、同筆、別筆について触れた箇所があるが、それらは注意を促す目的にすぎず、全てを弁別しての発言でないことを承知されたい。

なお、朱の声点が本来のものか否かはにわかに判断出来ないが、1073「しまつ山ふり」の傍書「は」に濁声点があり、「は」は別筆と思われるため、声点も後人の所為と見るべきであらうか。この声点の存在も注記に譲った。

〔注〕

(1) 久曾神昇氏『崇徳天皇御本古今和歌集』（昭15刊）により紹介された崇徳天皇御本のことである。翻刻は久曾神氏『古今和歌集成立論資料編下』（昭35刊）にも収め

られる。また小松茂美氏『古筆学大成』第三卷(平1刊)に書影がある。雅経筆本の引用は、久曾神氏の主として前著による。

- (2) 小倉公脩は正二位権大納言実教の二男。正二位権中納言に至り、建武四年(三三七)二月十七日薨、四十四歳(『公卿補任』等による)。続千載集以下に七首入集する(二条派歌人であるが、古筆切等の伝称筆者としては管見に入らず、本書のツレの存在も知らない。

- (3) 拙稿「清輔本古今集考(上)」(『斯道文庫論集』26平4・3)59-60頁参照。

- (4) 伊達家旧蔵本を用いるが、例示の採択に当っては冷泉家時雨亭叢書第二卷(平6刊)所収の嘉禄二年本、貞応二年本本文も考慮の対象とする。

- (5) 雅経筆本、「り」の右に傍書「れ」がある。
(6) 雅経筆本、「を」の左に傍書「の」がある。
(7) 雅経筆本、「に」の左に傍書「と」がある。
(8) 本書、「もとの」の右に傍書「ヲナシ」(同筆)がある。
(9) 雅経筆本、「す」の右に傍書「て」がある。
(10) 雅経筆本、「ち」の右に傍書「な」がある。

凡例

以下は家蔵伝小倉公脩筆『古今和詞集』一帖(存卷十一-十五)の翻刻である。翻刻に際し以下の措置を施した。

1、本行のみを翻字し、見せ消ち訂正、本行の補記、傍書、書入れ、合点、声点等は採用せず、全て後掲注記に委ねることとした。

2、改行は底本通りとし、半葉ごとに「」で示し、丁数を記した。なお、誤綴されている巻二十の一葉は丁数に入れず末尾に翻字した。

3、漢字は原則として通行字体に改めた。

4、歌頭に新編国歌大観番号を付した。また、1に関わる注記を有する場合、歌番号の右傍に*を付した。必ず参照された

古今和歌集卷第十一 恋詞一

たいしらす よみひとしらす

469 ほど、きすなくやさつきのあやめくさ

あやめもしらぬこひもするかな

そせいほうし

470 おとにのみきくのしらつゆよるはおきて

ひるはおもひにあへすけぬへし

きのつらゆき

471* よしのかはいはなみはやくゆくみつの

はやくそ人をおもひそめてし

ふちはらのかちをん

472 しらなみのあとなきかたにゆくふねも

かせそたよりのしるへなりける

ありはらのもとかた」1

473* おとはやまをとにき、つ、あふさかの

せきのこなたに人をまつかな

474 たちかへりあはれとそおもふよそにても

人にこゝろををきつしらなみ

つらゆき

475 よの中はかくこそありけれふく風の

めにみぬ人もこひしかりけり」

さごんのむまはのひをりの日むかひに

たてたりけるくるまのしたすた

れよりをんなのほのかにみえければ

よんてつかはしける

ありはらのなりひらの朝臣

476* みすもあらすみもせぬ人のこひしきは

あやなくけふやなかめくらさん」2

かへし よみ人しらす

477 しるしらぬなにかあやなくわきていはん

をもひのみこそしるへなりけれ

かすかのまつりのつかひにまかれ

りけるときにものみにいたりけ

る女のもとに家をたつねてつかはせ

りける みふのた、みね」

478* かすかの、ゆきまをわけてをひてくる

くさのはつかにみえしきみはも

人のはなつみしけるところにま

かりてそこなりける人のもとに

よみてつかはしける

つらゆき

479* やまさくらかすみのまよりほのかにも」3

みてしひとこそ恋しかりけれ

たいしらす もとかた

480 たよりにああらぬおもひのあやしきは

こゝろを人につくるなりけり

をふしかうちのみつね

481* はつかりのはつかにこゑをき、しより

なかそらにのみものおもふかな」

つらゆき

482* あふことのくものはるかになるかみの

をとにき、つゝこひわたる哉

よみ人不知

483 かたいとをこなたかなたによりかけて

あはすはなにをたまのおにせん

484* ゆふくれのくものはたてにものおもふ」4

あまつそらなるひとこふるみは

485 かりこものおもひみたれてわれこふと

いもしるらめや人しつけすは

486 つれもなき人をやねたく白露の

をくとはなけきぬとはしのはん

487* ちはやふるかものやしろのゆふたすき

ひとひもきみをかけぬひそなき」

488 わか恋はむなしきそらにみちぬらし

おもひやれともゆくかたもなし

489* するかなるたこのうらなみた、ぬひは

あれとんき^(も)みをこひぬ日そなき

490 ゆふつくよさすやをかへのまつの葉の

いつともわかぬ恋もするかな

491 あしひきの山したみつのこかくれて」5

たきつこゝろをせきそかねつる

492 よしのかはいはきりとをしゆくみつの

おとにはたてしこひはしぬとん^(も)

493* たきつせのなかにもよとはありてふを

なそわか恋のふちせとん^(も)なき

- 494 やまたかみしたゆく水のしたにのみ
なかれてこひんこひはしぬとも」
- 495 おもひいつるときはのやまのいはつ、し
いはねはこそあれこひしきものを
- 496 ひとしれすおもへはくるしくれなるの
すゑつむ花のいろにいてなん
- 497 あきの、のをはなにましりさく花の
色にやこひんあふよしをなみ
- 498* わかその、むめのほつゑにうくひすの」6
ねになきぬへき恋もするかな
- 499 あしひきのやまほと、きすわかことや
きみにこひつ、いねかてにする
- 500* なつなれはやとにふすふるかやりひの
いつまてわか身したもえにせん
- 501 恋せしとみたらし河にせしみそき
かみはうけすそなりにけらしも」
- 502 あはれてふことたになくはなにをかは
恋のみたれのつかねをにせん
- 503 おもふにはしのふることそまけにける
- 色にはいてしとおもひしものを
- 504 わか恋を人しるらめやしきたえの
まくらのみこそしらはしるらめ
- 505* あさちうのおの、しのはらしのふとも」7
ひとしるらめやいふ人なしに
- 506 人しれぬおもひやなそとあしかきの
まちかけれとんあふよし(も)のなき
- 507 おもふともこふともあはんものなれや
ゆふてもたゆくとくるしたひも
- 508* いてわれを人なとかめそをほふねの
ゆたのたゆたにものおもふころを」
- 509 い勢のうみにつりするあまのうけなれや
こゝろひとつをさためかねつる
- 510* いせのうみのあまのつりなはうちはへて
くるしくのみやをもひわたらん
- 511* なみたかはなかみなかみをたつねけん
ものおもふときのわか身なりけり
- 512* たねしあらはいはにもまつはおひにけり」8
恋をしこひはあはさらめやも

- 513 あさなく／＼たつかはきりのそらにのみ
うきておもひのあるよなりけり
- 514* わすらるゝときしなればあしたつの
おもひみたれてねをのみそなく
- 515 からころもひもゆふくれになるときは
かへす／＼そ人は恋しき」
- 516* よひ／＼にまくらさためんかたしらす
いかにねしかはゆめにみえけん
- 517 恋しきにいのちをかふるものならば
しにはやすくそあるへかりける
- 518 人のみもならはし物をあはすして
いさこゝろみんこひやしぬると
- 519* しのふれはくるしき物を人しれす」9
おもふてふことたれにかたらん
- 520* こむよにもはやなりなんみのまへに
つれなき人をむかしとおもはん
- 521 つれもなきひとをこふとてやまひこの
こたへするまでなけきつる哉
- 522 ゆくみつにかすかくよりもはかなきは

- をものはぬ人をおもふなりけり」
- 523* 人を、もふこゝろはわれにあらねはや
みのまとふたにしられざる覽
- 524 おもひやるさかひはるかになりやす
まとふゆめちにあふ人のなき
- 525* ゆめのうちにあひみんことをたのめつ、
くらせるよひはねむかたもなし
- 526* こひしねとするわさならしむはたまの」10
よるはすからにゆめにみゆるは
- 527 なみたかはまくらなかるゝうきねには
ゆめもさたかにみえすそありける
- 528* 恋すれはわか身はかけとなりけり
さりとして人にそはぬものから
- 529* かゝりひにあらぬものからなそもかく
なみたのかはにうきてもゆらん」
- 530* かゝりひのかけとなる身のかなしきは
なかれてしたにもゆるなりけり
- 531* はやきせにみるめをいせは我袖の
なみたのかはにうゑましものを

- 532* おきへにもよらぬたまものなみのうゑに
 みたれてのみやこひわたりなん
- 533* あしかものさはいりえのしらなみの「11
 しらすやひとをかくこひんとは
- 534 ひとしれぬおもひをつねにするかなる
 ふしのやまこそわか身なりけれ
- 535 とふとりのこゑもきこへぬおくやまの
 ふかきこゝろを人はしらなん
- 536 あふさかのゆふつけとりもわかごとく
 人や恋しきねのみなくらん
- 537 あふさかのせきになかる、いはし水
 いはてこゝろにおもひこそすれ
- 538 うきくさのうへはしけれふちなれや
 ふかきこゝろをしるひとのなき
- 539* うちわひてよは、んこゑにやまひこの
 こたえぬそらはあらしとそをもふ
- 540* こゝろかへするものにもかたはら(こゝろ)「12
 くるしきものとひとにしらせん
- 541* よそにしてこふれはくるしいれひもの

- をなしこゝろにいさむすひてん
- 542 はるたてはきゆるこほりの、こりなく
 きみかこゝろはわれにとけなん
- 543* あけたてはせみのをりはへなきくらし
 よるはほたるのもへこそわたれ
- 544 なつむしの身をいたつらになすことも
 ひとつおもひによりてなりけり
- 545 ゆふされはいと、ひかたきわかそてに
 あきの露さへをきそはりつ、
- 546 いつとても恋しからすはあらねとん(も)
 あきのゆふへはあやしかりけり
- 547 あきのたのほにこそ人を恋さらめ「13
 などかこゝろにわすれしもせむ
- 548* あきのたのほのうへてらすいなつまの
 ひかりのまにもわれやわする、
- 549* 人めもるわれかはあやなはなす、き
 などかほにて、恋をせさらん
- 550* あはゆきのたまれはかてにくたけつ、
 わかものおもひのしけきころ哉

551* をくやまのすかのねしのきふるゆきの
けぬかといはん恋のしけきに「14

古今和調集卷第十二 恋調二

たいしらす をの、こまち

552 をもひつ、ぬれはや人のみえつらん

ゆめとしりせはさめさらましを

553* うた、ねに恋しき人をみてしより

ゆめてうものはたのみそめてき

554* いとせめて恋しきときはむはたまの「

よるのころもをかへしてそきる

そせいほうし

555* あきかせの身にさむければつれもなき

人をそたのんくる、よことに

しもついつもてらに人のわさしけ

る日真せいかたうしにていへりける

ことはを(ま)たによみてをの、こまちか「15

もとにつかはせりける

あへのきよゆきのあそん

556* つ、めともそてにたまらぬしらたまは
人をみぬめのなみたなりけり

かへし こまち

557 おろかなるなみたそ、てにたまはなす

われはせきあえすたきつせなれは「

寛平御時きさいのみやのうたあは

せのうた ふちはらのとしゆきの朝臣

558* こひわひてうちぬるなかにゆきかよふ

ゆめのた、ちはうつ、ならなん

559* すみのえのきしによるなみよるさへや

ゆめのかよひち人めよくらん

をの、よしき「16

560* わか恋はみやまかくれのくさなれや

しけさまされとしる人のなき

きのともりの

561 よひのまもはかなくみゆる夏むしに

まとひまされる恋もする哉

562* ゆふされはほたるよりけにもれとん(も)

ひかりみねはや人のつれなき「

563 さゝの葉にをくしもよりもひとりぬる

わかこほもてそさへまさりける

564* わかやとのきくのかきねにをくしもの

きえかりてそわひしかりける

565 かはのせになひくたまものみかくれて

人にしられぬ恋もするかな

みふのたゝみね」17

566 かきくらしふるしらゆきのしたきへに

きえてものおもふころにもある哉

ふちはらのをき風

567* きみこふるなみたのどこにみちぬれは

みをつくしとそわれはなりぬる

568* しぬるいのちいきもやするとこゝろみん

たまのをはかりあはんてはなん」

569* わひぬれはしゐてわすれんとおもへとも

ゆめてふものそ人たのめなる

よみ人不知

570* わりなくもねてもさめても恋しきか

こゝろをいつちやはわすれん

571* 恋しきにわひてたましるまとひなは

むなしきからのなにやのこらん」18

きのつらゆき

572* きみこふるなみたしなくはからころも

むねのあたりは色はれなまし

たいしらす

573 よとゝもになかれてそゆくなみたかは

ふゆもこほらぬみはなりけり

574 ゆめちにも露やをくらんよもすから」

かよへるそてのひちてかはかぬ

そせいほうし

575 はかなくてゆめにも人をみつるよは

あしたのどこそをきうかりける

ふちはらのたゝふさ

576 いつはりのなみたなりせはからころも

しのひにそてはしほらさらまし」19

おほえの千さと

577 ねになきてひちにしかも春さめに

ぬれにしそてとゝはゝこたえん

としゆきのあそん

578* わかことくものやわひしきほと、きす

ときそとん^(も)なくよた、なく覽

つらゆき」

579 さ月やまこすゑをたかみほと、きす

なくねそらなる恋もするかな

をふしかうちのみつね

580* あき、りのはる、時なきこ、ろには

たちゐるそらもおもほへなくに

きよはらのふかやふ

581 むしのことこゑにたて、はなかねとも」20

なみたのみこそしたになかるれ

これさたのみこの家のうたあはせ

のうた よみ人不知

582* あきなれはやまとよんまでなくしかに

われをとらめやひとりぬる夜は

たいしらす つらゆき

583 あきの野にみたれてさける花の色の」

ちくさにものおもふころかな

みつね

584* ひとりしてものおもへはあきのたの

いなはのそよといふ人もなし

ふかやふ

585 人を、もふこ、ろはかりにあらねとん^(も)

雲井にのみもなきわたる哉」21

た、みね

586* 秋風にかきなすことこのゑにさへ

はかなく人の恋しかる覽

つらゆき

587* まこもかるよとのさは水あめふれは

つねよりもなをふかきわか恋

やまとに侍ける人につかはしける」

588 こえぬまはよしの、やまのさくら花

ひとつてにのみき、わたるかな

やよひはかりにもの、たうひける人

のもとにまた人まかりつ、せうそこ

すとき、てよみてつかはしける

589 つゆならぬこ、ろを花にをきそめて

かせふくことにものおもひそつく」22

たいしらす さかのうへのこれのり

590 わか恋にくらふのやまのさくら花

まなくちるともかすはまさらし

むねをかのおほより

591 ふゆかはのうへはこほれるわれなれや

したになかれてこひわたる覽

た、みね」

592* たきつせのねさしとまらぬうきくさの

うきたる恋もわれはするかな

ともりの

593* よひ／＼にぬきてわかぬるからころも

かけておもはぬときまもなし

594* あつまちのさやの中やまなか／＼に

なにしか人をおもひめけん」23

595 しきたへのまくらのしたにうみはあれと

ひとをみるめはをひすそありける

596* としをへてきえぬおもひはありながら

よるのたもとをなをこほりつ、

つらゆき

597 わか恋はしらぬやまにあらなくに

まとふこ、ろそわひしかりける」

598* くれなるのふりいて、なくなみたには

たもとのみこそ色まさりけれ

599 しらたまとみえしなみたもとしふれは

からくれなゐにうつろひにけり

みつね

600 なつむしをなにかいひけんこ、ろから

われもおもひにもへぬへらなり」24

た、みね

601* かせふけはみねにわかる、しらくもの

たえてつれなきみかこ、ろか

602 つきかけにわか身をかふるものならば

つれなき人もあはれとやみん

ふかやふ

603* こひしなはたかなはた、しよの中の」

つねきものといひはなすとん

つらゆき

604 撰津のなにはのあしのめもはるに

しけきわか恋人しるらめや

605* てもふれて月日へにけりしらまゆみ

をきふしよるはいこそねられぬ

606* ひとしれぬおもひのみこそわひしけれ」25

わかなけきをはわれのみそきく

ともりの

607* ことにいて、いはぬはかりそみなせかは

したになかれて恋しきものを

みつね

608 きみをのみおもひねにねしゆめなれば

わかこゝろからみつるなりけり」

た、みね

609 いのちにもまさりてをしくあるものは

みはてぬゆめのさむるなりけり

はるみちのつらき

610 あつさゆみひけはもとすゑわか、たに

よるこそまさされ恋のこゝろは

みつね」26

611 わか恋はゆくゑもしらすはてもなし

あふをかきりとおもふはかりそ

612* われのみそかなしかりけるひこほしの

あはてすくせるとし、なければ

ふかやふ

613 いまは、やこひしなましをあひみんと

たのめしことそいのちなりける」

みつね

614 たのめつ、あらてとしふるいつはりに

こりぬこゝろを人はしらなん

ともりの

615* いのちやはなにそはつゆのあたものを

あふにしかへはをしからなくに」27

古今和歌集卷第十三 恋哥三

やよひのつひたちにしひに人にも

いひてのちにあめのそほふりけるに

よみてつかはしける

ありはらのなりひらの朝臣

616* をきもせずねもせてよるをあかしては

はるのものとてなかめくらしつ

なりひらの家なりける女のもとに

よみてつかはしける

ふちはらのとしゆきの朝臣

617* つれくのなかめにまさるなみたかは

そてのみぬれてあふよしもなし

かの女にかはりて返によめる

なりひらのあそん」28

618 あさみこそ、てはひつらめなみたかは

みさへなかるるときかはたのまん

たいしらす よみ人不知

619 よるへなみ、おこそとほくへたてつれ

こ、ろはきみかかけとなりなき

620 いたつらにゆきてはきぬるものゆへに

みまくほしさにいさなはれつ、

621* あはぬよのふる白ゆきとつもりなは

われさへともなきへぬへき哉

この哥はある人のいはくかきのもとの人丸か也

なりひらのあそん

622* あき、りにさ、わけしあさの袖よりも

あはてこし夜そひちまさりける

おの、こまち」29

623* みるめなきわか身をうらとしらねはや

かれなてあまのあしたゆく覽

みなもとのむねゆきのあそん

624 あはすしてこよひあけなは春の日の

なかくや人をつらしとおもはん

みふのた、みね

625 ありあけのつれなくみえしわかれより」

あかつきはかりうきものはなし

ありはらのもとかた

626 あふことのなきさにしよるなみなれは

うらみてのみそたちかへりける

よみ人不知

627* かねてよりかせにさきたつなみなれや

あふことのなきまたきたつ覽」30

た、みね

628 みちのくにありといふなるなとりかは

なきなとりてはくるしかりけり

みはるのありすけ

629 あやなくてまたきなきなのたつたかは

わたらてやまんものならなくに

もとかた

630 ひとはいさわれはなきなのをしけれは

むかしもいまもしらすとをいはん

よみ人不知

631* こりすまにまたきなきなはたちぬへし

人にくからぬよにしすまへは

ひんかしのこてうわたりに人をしり

をきてまかりかよひけりしのひな

るところなりけれはかとよりも」31

えいらてかきのくつれよりかよひ

けるをたひかさなりけれはあるし

き、つけてかのみちによことに人を

ふせてまもらせけれはいきけれと

えあはてのみかへりきてよみてやりける

なりひらのあそん

632* ひとしれぬわか、よひちのせきもりは」

よひくことにうちもねな、ん

たい不知 づらゆき

633 しのふれと恋しき時はあしひきの

やまよりつきのいて、こそくれ

よみ人不知

634 こひくてまれにこよひそあふさかの

ゆふつけとりはなかくもあらなん」32

こまち

635* あきのよはなのみなりけりあふといへは

ことそともなくあけぬるものを

をふしかうちのみつね

636 なかしたもおもひそはてぬむかしより

あふ人からの秋のよなれは

よみ人不知」

637* しの、めのほからくくとあけゆけは

おのかきぬくになにそわひしき

藤原のくにつねの朝臣

638 あけぬとていまはのこゝろつくからに

なといひしらぬおもひそふ覽

寛平御時きさいのみやのうたあ

はせの哥 としゆきのあそん」33

639 あけぬとてかへるみちにはこきたれて

あめもなみたもふりそほちつ、

たいしらす 寵

640* しのゝめのわかれを、しみわれそまつ

とりよりさきになきはしめつる

よみひとしらす

641 ほとゝきすゆめかうつ、かあさつゆの」

をきてわかれしあかつきのこゑ

642 たまくしけあけはきみかなたちぬへみ

よふかくこしを人みけんかも

おほえの千さと

643 けさはしもおきけんかたもしらさりつ

おもひいつるそきへてかなしき

人にあひてのあしたによみてつか」34

はしける なりひらのあそん

644 ねぬる夜のゆめをはかなみまどろめは

いやはかなにもなりまさる哉

なりひらの朝臣の伊勢のくに、かり

のつかひにまかりける時齋宮なり

ける人にとみそかにあひてまたの

あしたにまた人やるすへなくておもひ」

をりけあひたに女のもとよりおこ

せたりける よみ人不知

645* きみやこしわれやゆきけんおもほへす

ゆめかうつ、かねてかさめてか

かへし なりひらのあそん

646* かきくらすこゝろのやみにまよひにき

ゆめうつ、とはこよひさためよ」35

たいしらす よみ人しらす

647 むはたまのやみのうつ、はさたかなる

ゆめにいくらもまさらさりけり

648 さよふけてあまのとわたる月かけに

あかすもきみをあひみつる哉

649* きみかなもわかなもた、しなにはなる

みつともいふなあひきとん(も)いはし」

650* なとりかはせ、のむもれきあらはれて

いかにせんとかあひみそめけん

651 よしのかはみつのこ、ろはやくとん(も)

たきのをとにはたてしとそおもふ

652* 恋しくはしたにやおもへむらさきの

ねすりの衣色にいつなゆめ

おの、はるかせ」36

653* はなす、きほにて、こひはなを、しみ

したゆふそでのむすほ、れつ、

たちはなのきよきかしのひにあひしれ

りけるをんなのもとよりおこせた

りける よみ人不知

654 おもふとちひとり／＼か恋しなは

たれによそへてふちころもきん」

かへし たちはなのきよき

655 なきこふるなみたにそでのそほちなは

ぬきかへかてらよるこそはきめ

たいしらす こまち

656* うつ、にはさこそはあらめゆめにさへ

ひとめをもるとみるかすへなさ

657* かきりなきおもひのまにまよるもこん」37

ゆめちをさへは人もとかめし

658 ゆめちにはあしもやすめすかよへとん(も)

うつ、にひとめみしことはあらず

よみ人不知

659 おもへともひとめつ、みのたかけれは

かはとみなからえこそわたらね

660 たきつせのはやきこ、ろをなにしかも」

ひとめつ、みのせきと、むらん

寛平御時きさいの宮のうたあはせの

うた きのとものり

661 くれなるの色にはいてしかくれぬの

したにかよひてこひはしぬとん(も)

たいしらす みつね

662 ふゆのいけにすむにほとりのつれもなく」38

そこにかよふと人にしらすな

663 さ、の葉にをくはつしものよをさむみ

しみはつくとも色にいてめや

よみ人しらす

664* やましなのをとほのやまのをとにたに

人のしるへくわか^(ママ)わかこひめかも

この哥ある人あふみのうねめのとなんまうす

きよはらのふかやふ

665 みつしほのなかれひるまをあひかたみ

みるめのうらによるをこそまで

たいらのさたふん

666 しらかはのしらすとん^(も)いはしそこきよみ

なかれてよゝにすまむとおもへは

ともりの」39

667 したにのみこふれはくるしたまのをの

たえてみたれん人なとかめそ

668* わか恋をしのひかねてはあしひきの

やまたちはなの色にいてぬへく

よみ人不知

669* おほかたはわかなんみなどこきてなん

よをうみへたにみるめすらなし」

さたふん

670* まくらよりまたしる人もなきものを

なみたせきあえすもらしつる哉

よみ人しらす

671 かせふけはなみうつきしのまつなれや

ねにあらはれてなきぬへらなり

この哥はある人のいはくかきのもとの」40

人丸かなり

672 いけにすむなを、しとりのみつをあさみ

かくるとすれとあらはれにけり

673 あふことはたまのをはかりなのたつは

よしの、かはのたきつせのこと

674 むらとりのたちにしわかないまさらに

ことなしふともしるしあらめや」

675 きみによりわかなははなに春かすみ

野にもやまにもたちみちにけり

伊勢

676* しるといへはまくらたにせてねし物を

ちりならなのそらにたつ覧」41

古今和歌集卷第十四 恋哥四

たいしらす よみ人しらす

677* みちのくのあさかのぬまのはなかつみ

かつみる人にこひやわたらん

678* あひみすは恋しきこともなからまし

おとにそ人をきくへかりける

つらゆき

679 いそのかみふるのなかみちなかくに

みすは恋しとおもはましやは

ふちはらのた、ゆき

680* きみてへは見まれみすまれふしのねの

めつらしけなくもゆるわか身を

伊勢

681 ゆめにたにみゆとはみえしあさなく」42

わかおもかけにはつるみなれは

よみ人不知

682 いしまゆく水のしらなみたちかへり

かくこそはみめあかすもある哉

683 い勢のあまのあさなゆふなにかつくてふ

みるめに人をあくよしもかな

とものり

684 はるかすみたなひくやまのさくら花

みれとんあかぬきみにもあるかな

ふかやふ

685 こゝろをそわりなきものとおもひぬる

みるものからや恋しかるへき

おふしかうちのみつね

686 かれはてんのちをはしらてなつくさの」43

ふかくも人のおもほゆるかな

よみ人不知

687* あすか、はふちはせになるよなりとん

おもひそめてし人はわすれし

寛平御時きさいの宮のうたあはせ

のうた

688 おもふてうことの葉のみやあきをへて

色もかはらぬものにはある覧

たいしらす

689* さむしろにころもかたしきこよひもや

われをまつらんうちのはしひめ

690* きみやこんわれやゆかんのいさよひに

まきのいたともさ、すねにけり

そせいほうし

691* いまこむといひしはかりになかつきの「44

ありあけのつきおまちてつるかな

よみ人しらす

692* つきよ、しよ、しと人につけやらん

こてふに、たりまたすしもあらず

693 きみこすはねやへもいらしこむらさき

わかもとゆひにしもはをくとん^(も)

694* みやきの、もとあらのこはき露をもみ

かせおまつこときみをこそまて

695* あな恋しいまもみてしかやまかつの

かきねにさけるやまとなてしこ

696 撰津のなにはおもはすやましろの

とはにあひみんことをのみこそ

つらゆき

697 しきしまのやまとにあらぬから衣「45

ころもへすしてあふよしもかな

ふかやふ

698 恋しとはたかなつけ、むことならん

しぬとそた、にいふへかりける

よみ人しらす

699* みよしの、おほかはのへのふちなみの

なみにをものは、われこひめやは

700* かくこひんものとはわれもおもひにき

こ、ろのうらそまさしかりける

701 あまのはらふみと、ろかしなるかみも

おもふなかをはさくるものかは

702* あつさゆみひきの、つ、らすゑつひに

わかおもふ人にことのしけ、ん

このうたある人あめのみかとのあふみの「46

うねへにたまひけるとなんまうす

703* なつひきのでひきのいとをくりかへし

ことしけくともたんとおもふな

このうたはかへしにたてまつりける

704 さと人のことはなつの、しけくとん^(も)

かれゆくきみにあはさらめやは

ふちはらのとしゆきのおそんのなり」

ひらのおそんの家なりけるをん

なをあひしりてふみつかはしける

ことはにいま、うてくあめのふり

けるをなんみわつらひ侍といへり

けるをき、てかのをんなにかはりて

よめりける ありはらのなりひらの朝臣

705* かすくにおもひをもはすとひかたみ」47

みをしるあめはふりそまされる

女なりひらのおそんをところさた

めすありきすとおもひてよみて

つかはせりける よみ人不知

706* おほぬさのひくてあまたにとまらねは

おもへとえこそたのまさりけれ

かへし 　　なりひらのおそん」

707* おほぬさとなにこそたてれなかれても

つひによるせはありてうものを

題不知 　　よみひとしらす

708* すまのうらにしほやくけふり風おいたみ

おもはぬかたにたなひきにけり

709* たまかつらはふきあまたにみえぬれは

たえぬこと(ママ)のうれしけもなし」48

710* たかさとによかれをしてかほと、きす

た、こ、にのみねたるこゑする

711* いてひとはことのみそよきつきくさの

うつしこ、ろは色ことにして

712 いつはりのなきよなりせはいかはかり

人のことのはうれしからまし

713 いつはりとおもふものからいまさら」

たかまことをかわれはたのまん

そせい

714* あきかせにやまのこの葉のうつろへは

人のこ、ろもいか、とそおもふ

寛平御時きさいの宮のうたあは

せの哥 　　ともりの

715 せみのこゑきけはかなしな夏ころも」49

うすくや人のならんとおもへは

たいしらす よみ人不知

716 うつせみのよの人ことのしけ、れは

わすれぬもの、かれぬへらなり

717* あかてこそおもはんなかはわすれなめ

そをたにのちのわすれかたみに

718 わすれなんとおもふこ、ろのつくからに

ありしよりけにまつそ恋しき

719* わすれなんわれをうらんなほと、きす

人のあきにはあはんともせず

720 たえすゆくあすかのかはのよとみなは

こ、ろあるとやひとのおもはん

この哥ある人のいはくなかどみの

あつま人が哥なり」50

721 よとかはのよとむと人はみるらめと

なかれてふかきこ、ろあるものを

そせい

722* そこふかきふちやはさはくやまかはの

あさきせにこそうはなみはたて

よみ人不知

723 くれなゐのはつはなそめの色ふかく」

おもひしこ、ろわれわすれめや

かはらのひたりのおほいまうちきみ

724 みちのくのしのふもちすりたれゆへに

みたれんとおもふわれならなくに

よみ人不知

725 おもふよりいかにせよとかあきかせに

なひくあさちの色ことになる」51

726 ち、の色にうつろふらめとしらなくに

こ、ろしあきのもみちならねは

おの、こまち

727 あまのすむさとのしるへにあらなくに

うらみんとのみ人のいふらん

しもつけのおむね

728* くもりひのかけとしなれるわれなれは」

めにこそみへねみをははなれは

つらゆき

729 いろもなきこ、ろを人にそめしより

うつろはんとはおもほへなくに

よみ人しらす

730 めつらしき人をみんとやしかもせぬ

わかしたひものとけわたるらん」52

731 かけるふのそれがあらぬかはるのひの

ふるひとみれはそてそひちぬる

732* ほりへこくたな、しをふねこきかへり

をなし人にや恋わたるらん

伊勢

733* わたつみのあれにしとこをいまさるに

はらは、そてやあはにうきなん」

つらゆき

734* むかへになをたちかへるこ、ろかな

恋しきことにものわすれせて

人をしのひにあひしりてあひかたく

ありければその家のあたりをま

かりありきけるをりにかりのな

くをき、てよみてつかはしける」53

おほとものくろぬし

735* おもひいて、恋しきときははつかりの

なきてわたると人はしらすや

みきのおほいまうちきみすます

なりにければかのむかしをこせた

りけるふみともをとりあつめてかへ

すとてよみてをくりける」

ないしのすけふちはらのよるかの朝臣

736* たのめこしことの葉いまはかへしてん

わか身ふるれはをきところなし

返し　こむ院のおほいまうちきみ

737* いまはとてかへすことの葉ひろひをきて

おのかものからかたみとやみん

題不知　よるかの朝臣」54

738 たまほこのみちはつねにもまとはなん

人をとふともわれかとおもはん

よみひとしらす

739* まてとは、ねてもゆかなんしゐてゆく

こまのあしをれまへのたなはし

中納言みなもとの、ほるのあそん

のあふみのすけに侍けるときに

よみてやれりける

閑院

740* あふさかのゆふつけとりにはあらはこそ

きみかゆき、をなくくもみめ

たいしらす 伊せ

741 ふるさとにあらぬものからわかたために

人のこゝろのあれてみゆらん 55

寵

742* やまかつのかきほにはへるあをつゝら

ひとはくれとん(も)ことつてのなき

さかゐのひとさね

743* おほそらは恋しき人のかたみかは

ものおもふことになかめちるらん

よみ人しらす

744* あふまてのかたみもわれはなにかせん

みてもこゝろのなくさまなくに

おやのまもりける人のむすめに

いとしのひにあひてもいひけるあひ

たにおやのよふといひければいそきて

かへるとてもをなんぬきおきていり

にけるその、ちもおかへすとてよめる 56

おきかせ

745 あふまてのかたみとてこそと、めけめ

なみたにうかふもくつなりけり

たいしらす よみ人不知

746* かたみこそいまはあたなれこれなくは

わする、時もあらまし物を

(白紙) 57

古今和詞集第十五 恋哥五

こてうのきさいのみやのにしのたいに

すみける人にほにはあらてもいひ

わたりけるをむ月のとうかあまり

はかりになんほかへかくれにけるにあ

りところはき、けれとえものもいはて

またのとしの春梅花さかりに月のおも

しろかりける夜そ(ママ)こを、もひいて、

かのにしのたいにいきて月のかたふく

まてあはらなるいたしきにおせりて

よめりける ありはらのなりひらのあそん

747* 月やあらぬ春やむかしの春ならぬ

わか身ひとつはもとのみにして

題不知 藤原のなかひらのあそん

748 はなす、きわれこそしたにおもひしか

ほにて、人にむすはれにけり」58

藤原のかけすけの朝臣

749* よそにのみきかましものを、とはかは

わたるとなしにみなれそめけん

おふしかうちのみつね

750 わかごとくわれを、もはん人も哉

さてもやうきとよをこ、ろみん

もとかた」

751 ひさかたのあまつそらにもすまなくに

人はよそにそおもふへらなる

よみ人しらす

752 みてもまたくもみまくのほしければ

なる、を人はいとふへらなり

きのとものり

753* くまもなくきたるあまのわれなれや」59

いとはれてのみよをはへぬ覽

よみひとしらす

754* はなかたみめならふ色のあまたあれは

わすられにけんかすならぬ身は

755* うきめのみおひてみたる、うらなれは

かりにのみこそあまはよるらめ

伊せ」

756* あひにあひてものおもふころのわかそてに

やとるつきさへぬる、かほなる

よみひとしらす

757 あきならてをくしらつゆはねさめする

わかたまぐらのしつくなりけり

758 すまのあまのしほやき衣をさをあらみ

まとをにあれやきみかきまさぬ」60

759 やましろのよとのわかこもかりにたに

こぬ人たのむわれそはかなき

760* あひみねは恋こそまされみなせかは

なに、ふかめておもひそめけん

761* あか月のしきのはねかきも、はかき

われそかすかくきみかこぬ夜は

762 たまかつらいまはたゆとやふくかせの

おとにも人のきこへさるらん

763 わかそてにまたきしくれのふりぬるは

きみかこ、ろにあきやきぬらん

764* やまの井のあさきこ、ろはおもはぬを

かけはかりのみ人のみゆらん

765 わすれくさたねとらましをあふことの

いとかくかたきものとしりせは」61

766 こふれとんあふよのなきはわすれくさ

ゆめちにさへやおひしけるらん

767 ゆめにたにあふことかたくなりゆくは

われやいをぬる人やわする、

けむけいほうし

768 もろこしもゆめに見しかはちか、りき

おもはぬなかそはるけかりける」

さたの、ほる

769* ひとりのみなかむるやとのつまなれは

人をしのふのくさそおひける

僧正へせう

770 わかやとはみちもなきまであれにけり

つれなき人をまつとせしまに

771 いまこむといひてわかれしあしたより」62

おもひくらしのねをのみそなく

よみひとしらす

772 こめやとはおもふものからひくらしの

なくゆふくれはたちまたれつ、

773* いまはとわひしきものをさ、かにの

ころもにか、りわれをたのむる

774* いまはこしとおもふ物からわすれつ、

またる、事のまたもやまぬか

775 つきよにはこぬ人またるかきくもり

あめもふらなんわひつ、もねん

776 うへていにしあきたかるまでみえこねは

けさはつかりのねにそなきぬる

777 ぬひとをまつゆふくれのあきかせは

いかにふけはかわひしかるらん」63

778* ひさしくもなりにけるかなすみのへの

まつはくるしきものにそありける

かねみのおほきみ

779 すみのえのまつほとひさになりぬれは

あしたつのねになかぬひはなし

なりひらのあそんのあひしりて侍

けるをかれかたになりにつければ」

ち、かやまとのかみに侍けるもとへ

まかるとてよみてつかはしける

伊勢

780* みわのやまいかにまちみんとしふとも

たつぬる人もあらしとおもへは

たいしらす 雲林ゐんのみこ

781* ふきまよふのかせをさむ秋はきの」64

うつりもゆくか人のこゝろの

おのゝこまち

782 いまはとてわか身しくれにふりぬれは

ことのはさへにうつろひにけり

おのゝさたき

783* 人をおもふこゝろこの葉にあらはこそ

かせのまに／＼ちりもみたれめ」

なりひらの朝臣のきのありつねか

むすめにすみけるをうらむること

ありてしはしのあいたひるはきてゆ

ふさはかへりのみしければよみて

おくりける

784* あまくものよそにも人のなりゆくか

さすかにめにはみゆるものから」65

かへし なりひらのあそん

785 ゆきかへりそらにのみしてふることは

わかるるやまのかせはやみなり

たいしらす かけのりのおほきみ

786 からころもなれは身にこそまつはれめ

かけてのみやはこひんとおもひし

とものり」

787 あき風は身をわけてしもふかなくに

人のこゝろのそらになる覽

みなもとのむねゆきの朝臣

788* つれもなくなりゆく人のことくさそ

あきよりさきのもみちなりける

こゝちそこなへりけるころあひし

りて侍ける人のとはてこゝちおこ

たりてのちとふらへりければ

よみてつかはしける」66

兵衛たち花のたかつねの朝臣むすめ

789* してのやまふもとよりのみかへりきぬ

つらき人よりまつこえしとて

あひしれりける人のやうやくかれ

かたになりけるあひたにやけたるち

の葉に文をさしてつかはせりける

こまちかあね」

790 ときすきてかれゆくおのゝあさちには

いまはおもひそたえすもえける

ものおもひけるころものへまかりけ

れはのちに野火のもえけるをみてよめる

いせ

791* ふゆかれのゝへとわか身をゝもひせは

もえてん^(も)はるをまたましものを」67

たいしらす ともりのり

792 水のあわのきえてうきみといひなから

なかれてなをもたのまるゝかな

よみ人しらす

793* みなせかはありてゆくみつなくはこそ

つひにわか身をたえぬとおもはめ

みつね」

794 よしのかはよしや人こそつらからめ

はやくいひてしことはわすれし

よみひとしらす

795* よの中の人のこゝろははなそめの

うつろひやすきものにそありける

796* こゝろこそうたてにくけれそめさらは

うつろふこともおしからまじや」68

こまち

797* いろみえてうつろふ物はよの中の

人のこゝろのはなにそありける

よみ人しらす

800* いまはとてきみかくれなはわかやとの

花をはひとり見てやしのはん

むねゆきのあそん

801 わすれくさかれもやするとつれもなき

人のこゝろにしもおかなん

よみ人不知

798* 我のみやよをうの花となきわひん

人のこゝろのはなとちりなは

そせいほうし

799 おもふともかれなん人をいか、せん」69

あかすちりぬる花とこそみめ

寛平御時御屏風に哥か、せ給ける

ときよみける

そせい

802* わすれくさなにをかたねとおもひしは

つれなき人のこゝろなりけり

題不知 けんけいほうし

803* あきのたのいねてふこともかけなくに」

なにをうしとて人のかる覧

つらゆき

804* はつかりのなきこそわたれよの中の

人のこゝろのあきしうければ

よみ人不知

805 あはれともうしとも物をおもふとき

なとかなみたのいとなかるらむ」70

806 みおうしとおもふにきえぬものなれは

かくてもへぬるよにこそありけれ

ないしのすけ藤原のなをいこの朝臣

807* あまのかるもにすむ、しのわれからと

ねをこそなかめ人はうらみし

いなはもとよしのおほきみのむすめ

808* あひみぬもうきもわか身のからころも」

おもひしらすもとくるひもしかな(マ)

寛平御時きさいの宮の哥合うた

すかのた、おん

809* つれなきをいまはこひしとおもへとも

こゝろよはくもをつるなみたか

たいしらす いせ

810 人しれすたえなましかはわひつゝも」71

なきなそとたにいほまし物を

よみ人不知

811 それをたにおもふことゝてわかやとを

見きとないひそ人のきかくに

812* あふこと(も)のいとんたえぬるときにこそ

人の恋しきこと(も)んしりぬれ

813 わひはつるときさへものゝかなしきは」

いつこをしのふなみたなるらん

ふちはらのおき風

814* うらみてもなきてもいはん人そなき

かゝみにみゆるかけならすして

よみ人不知

815 ゆふされは人なきとこをうちはらひ

なけかんためとなれる我身か」72

816 わたつみのわかみこすなみたちかへり

あまのすむてふうらみつるかな

817 あらをたをあらすきかへしかへしても

人のこゝろをみてこそやまめ

818* ありそうみのはまのまさこをたのためしは

わするゝことのかすにそありける

819* あしへより雲井をさしてゆくかりの」

いやとをさかるわか身かなしも

820 しくれつゝもみつるよりもことのはの

こゝろのあきにあふそわひしき

821* 秋風のふきとふきぬるむさしのは

なへて草はのいろかはりけり

こまち

822 あき風にあふたのみこそかなしけれ

わか身むなしくなりぬとおもへは」73

たひらのさたふん

823 あき風のふきうらかへすくすのはの

うらみてもなをうらめしき哉

よみひとしす(マ)

824* 秋といへはよそにそきゝしあた人の

われをふるせるなにこそありけれ

825* わすらるゝ身をうちはしのなかたえて

人もかよはぬとしそへにける

さかのうへのこれのり」

826* あふことをなからはしのなからへて

こひわたるまにとしそへにける

ともりの

827 うきなからけぬるあはとん(も)なりなゝん

なかれてとたにたのまれぬ身は

よみ人不知

828* なかれてはいもせのやまの中におつる

よしの、かはのよしやよのなか」74

○

しまつ山ふり

1073* しつは山うちいて、みれはかさしゆく

のしまこきかくるたな、しおふね

かみあそひのうた

とりもの、うた

1074* 神かきのみむろのやまのさかきは、

かみのみむろにしけりあひにけり

1075 しもやたひをけとかれせぬさかきはの」

たちさかゆへきかみのきねかも

1076* まきもくのあなしの山のやまひと、

人もみるかね山かつらせよ

1077 みやまにはあられふるらしとやまなる

まさきのかつらいろつきにけり

1078 みちのくのあたちのまゆみわかひかは

すゑさへよりこしのひく」に

1079 わか、とのいた井のしみつさと、をみ」

補注

注記。

471 「はやく」の「はや」見せ消ち、右傍「たかい」。

500 「したもえにせん」の「に」見せ消ち、右傍「を」。

473 「人をまつかな」の「人をまつ」見せ消ち、右傍「としをふるイ」。

508 「ころを」の「を」見せ消ち、右傍「そい」。

476 「さこん」見せ消ち、右傍「右近イ」。

点注記。「そい」の「そ」の左に朱二点注記。

同 「こひしきは」の「き」見せ消ち、右傍「くい」。

510 「くるしくのみや」の下の「く」見せ消ち、右傍「と」。

478 「まつりの」の「の」見せ消ち、右傍「に」。

511 「なか」の「か」見せ消ち、右傍「に」。

同 「をひてくる」の「ひ」の下に小丸印、「い」補入。

512 「あらは」の「ら」見せ消ち、右傍「れい」。

479 「よみて」の上に小丸印、「後に」補入。

同 「にけり」の「に」に合点、「にけり」の下に「用之歟」と小字書入れ、「にけり」の右傍に「ぬへし」、傍書見せ消ち。

481 「ものおもふかな」の「の」の下に小丸印、「を」補入。

482 「あふことのくものはるかに」の二つの「の」見せ消ち、それぞれ右傍に「は」「ゐ」。

同 「こひは」の「は」の左に朱二点注記。

484 「ゆふくれの」の「の」見せ消ち。右傍「は」。

514 「あしたつ」の「つ」の左に朱二点注記。

同 「こふるみは」見せ消ち、右傍「をこふとてイ」。

516 「よひく」の右傍に「ゆふくれは」、傍書の右に付点（見せ消ち）し、「不用之歟」と小字書入れ。

487 「そなき」見せ消ち、右傍「はなしイ」。

同 「しらす」見せ消ち、右傍に「もなしイ用」。

489 「そなき」見せ消ち、右傍「はなしイ」。

同 「ねしかは」の「かは」見せ消ち、右傍「夜かイ（夜イの上より重書）」。

493 「なそ」の「そ」の右傍「と」、傍書見せ消ち。

519 「しのふれは」の「は」見せ消ち、右傍「と」。

498 「ほつえ」の「ほ」の右傍「はい」、「つ」の左に朱二点

- 520 「なりなんみのまへに」の「み」見せ消ち、「な」と「ん」の間の右傍「な」、「み」の右傍「め」。
- 523 「人を、もふ」の「を」に合点、「を、もふ」の右傍「こふる」、傍書の右傍に付点（見せ消ち）。
- 525 「たのめつ、」の「め」見せ消ち、右傍「み」、「み」に合点。
- 526 「みゆるは」の「ゆるは」見せ消ち、左傍「えつ、」、「えつ、」に合点。
- 528 「ものから」の「から」見せ消ち、右傍に「ゆふ」、また「ゆへ」。「ゆふ」見せ消ち。
- 529 「ものから」見せ消ち、右傍「わか身の」。
- 同 「なそもかく」の「そ」の左に朱二点注記。
- 530 「かなしきは」の「かな」見せ消ち、右傍「わひイ」。
- 531 「なみたのかはに」の「か」字、最初「う」に誤り、重書訂正、更に右傍に「か」。
- 532 「おきへ」の「へ」の左に朱二点注記。
- 533 「かくこひんとは」に合点、右傍「こひんものとは」、傍書の右に付点（見せ消ち）。
- 539 「そら」見せ消ち、右傍「山」。
- 540 「かたらは」の「ら」見せ消ち、右傍「恋」。
- 541 「をなし」の「し」の左に朱二点注記。
- 543 「あけたては」の「は」の左に朱二点注記。
- 548 「ほのうへてらす」の「へ」と「て」の間、右傍「を」。
- 549 「恋をせさらん」の「をせさ」見せ消ち、右傍「すしもあい」。
- 550 「かてに」の「に」右傍に「と」、「に」とともに合点。
- 同 「か」「て」とともに左に朱二点注記。傍書「と」に朱二点注記か（但し、汚れとも見ゆ）。
- 同 「しけき」の左傍「ふかき」、傍書見せ消ち。
- 551 「すかのね」の「ね」の右傍「は」、傍書見せ消ち。
- 同 「しのき」の「き」、最初誤って「ふ」とし、「き」重書、念のため右傍に「キ」と書く（同筆）。「キ」に合点。
- 同 「けぬかと」の「かと」見せ消ち、右傍「とかイ」。
- 553 「そめてき」の「き」の左に朱二点注記。
- 554 「かへしてそきる」の「き」の右傍「ぬ」、傍書見せ消ち。
- 555 「たのん」の「ん」の右傍「む」。
- 556 「真せいか」の「せいか」見せ消ち、右傍「法師の」。
- 同 「ことはをたに」の「を」の下に小丸印、「う」補入。

- 558 「た、ち」の左に朱で、それぞれ、一点、二点、一点注記。
- 559 「すみのえ」の「の」に合点、右傍「よし」、傍書右傍に付点(見せ消ち)。
- 560 「しる人のなき」の「の」に合点、右傍「モ」、傍書右傍に付点(見せ消ち)。
- 562 「ゆふされは」の「れ」に合点、右傍「り」、傍書見せ消ち。
- 同 「もれとん」の「も」と「れ」の間、右傍「ゆ」。同筆か。
- 564 「わひしかりける」の「わ」見せ消ち、右傍「こ」、「こ」に合点。
- 567 「なりぬる」の「ぬ」見せ消ち、右傍「け」、「け」に合点。
- 568 「こ、ろみん」の「ん」見せ消ち、右傍「に」。
- 同 「あはんてはなん」の「ては」見せ消ち、右傍「といは」、傍書に合点。
- 569 「ゆめてふものそ」の「てふ」見せ消ち、右傍「といふい」。
- 570 「恋しきか」の「か」の左に朱二点注記。
- 571 「のこらん」の「ら」に合点、右傍「さ」、傍書見せ消ち。
- 572 「色はれなまし」の「はれ」見せ消ち、右傍「もえな」、傍書に合点。
- 578 「わひしき」の「わひ」見せ消ち、右傍「かな」、傍書に合点。
- 580 「たちゐる」の「る」見せ消ち、右傍「のい」。
- 582 「とよんまで」の「ん」の右傍「む」。
- 584 「あきのたの」の「た」見せ消ち、右傍「よ」。
- 同 「いなはの」の「の」に合点、左傍「も」、傍書見せ消ち。
- 同 「いふ人もなし」の「も」見せ消ち、左傍「の」、「の」に合点、「し」の上より「き」重書。
- 586 「はかなく」に合点、右傍「あや」、傍書見せ消ち。
- 587 「つねよりもなをふかき」の「もなをふかき」見せ消ち、左傍「ことにまさる」、傍書に合点。
- 592 「たきつせの」の「の」見せ消ち、右傍「にい」。
- 同 「ねさしとまらぬ」の「まら」見せ消ち、右傍「とめ」。
- 593 「からころも」の「ら」見せ消ち、右傍「り」。
- 594 「なにしか」の「か」に合点、右傍「に」、傍書見せ消ち。
- 同 「おもひめけん」の「ひ」と「め」の間、右傍「そ」。

596 「こほりつ、」の「つ、」見せ消ち、右傍「けりイ」。

598 「ふりいて、なく」の「て」の下に小丸印、「つ」補入、
「く」に合点、右傍「き」、傍書見せ消ち。

601 「しらくもの」の「しらくも」見せ消ち、右傍「横雲」。

603 「つねきものと」の「ね」の下に小丸印、「な」補入。

605 「月日へにけり」の「り」見せ消ち、右傍「る」、
「る」に合点。

同 「いこそねられね」に合点、左傍「ものをこそおもへ」、
傍書を見せ消ちの後、すり消し。

606 作者「貫之」、別筆小字補記。

同 「われのみそきく」の「きく」見せ消ち、右傍「シル」、
傍書に合点。

607 「したになかれて」の「なかれて」見せ消ち、左傍「か
よひて」、傍書に合点。

612 「ひこほしの」の「の」見せ消ち、右傍「も」、
「も」に合点。

615 「をしからなくに」の「なくに」に合点、「な」の左傍
「ぬ」、
「に」の左傍（「く」の左傍が正しい）「み」、
「ぬ」と「み」ともに見せ消ち。

616 「つひたちに」の「ち」の下に小丸印、「より」補入、

「に」見せ消ち。

同 「もの」の下に小丸印、「の」補入。

617 「なりひらの家なりける」の「の」の下に小丸印、「朝臣
の」補入、「家」と「な」の間、右傍「に」、下の「な」見せ消
ち、右傍「侍」。

同 「ふちはらの」見せ消ち。

621 「きへぬへき哉」の「きへ」「哉」見せ消ち、それぞれ右
傍に「けぬ」「物を」、傍書ともに合点。

同 「人丸か也」の「か」の下に小丸印、「哥」補入。

622 「あき、りに」の「、りに」見せ消ち、右傍「の、に」、
傍書に合点。

同 「あはてこし」の右傍「こし」、傍書に合点、左傍「ぬる」、
傍書見せ消ち。

623 「あしたゆく覧」の「覧」見せ消ち、右傍「クル」、傍書
に合点。

627 「あふことのなき」の「の」見せ消ち、「き」の下に小丸
印、「に」補入。

631 「またき」の「き」見せ消ち、右傍「も」。

- 632 「かとよりも」の「り」の下に小丸印、「し」補入。
- 同 「かへりきて」の「き」見せ消ち。
- 635 「こまち」の上に「をの、」と別筆補記。
- 同 「あきのよは」の「は」見せ消ち、右傍「も」、傍書に合点。
- 637 「ほからく」との「か」の左に朱二点注記。
- 同 「なにそわひしき」の「に」「わひ」見せ消ち、それぞれ右傍に「る」「かな」、傍書ともに合点。
- 640 「寵」の下に二行割で「一説ウツク 或本カク／一説チヨウ用之」(同筆)とある。
- 645 「かりのつかひに」見せ消ち。
- 同 「まかり」の「り」の下に小丸印、「たり」補入。
- 同 「またのあしたにまた」の後の「また」見せ消ち。
- 同 「おもひをりけ」の「け」の下に小丸印、「る」補入。
- 646 「まよひにき」の「よ」見せ消ち、右傍「と」。
- 同 「こよひ」見せ消ち、右傍「よひと」、傍書に合点。
- 649 「わかなもた、し」の「、」見せ消ち、右傍「て」。
- 650 「あらはれて」の「て」見せ消ち、右傍「は」。
- 652 「したにや」の「や」見せ消ち、右傍「を」。
- 653 「したゆふそて」の「そて」見せ消ち、右傍「ひも」、傍書に合点。
- 656 「こまち」の右傍に「をの、」を別筆補記。
- 同 「さこそはあらめ」の「さ」と「こ」の間、右傍「も」、
「は」見せ消ち。
- 同 「みるかすへなさ」の「すへな」見せ消ち、右傍「わひし」また「わひしさ」、ともに合点を付す。「みるか」の「か」の下に小丸印。
- 657 「おもひのまにま」の「ま」と「に」の間、右傍「ま」、
下の「ま」見せ消ち。
- 同 「ゆめちをさへは人もとかめし」の「は」「も」見せ消ち、
それぞれ右傍「に」「は」。ただし、右傍「に」文字、虫損のため推定。
- 664 「わかわかこひめかも」の上の「わか」見せ消ち。
- 668 「いてぬへく」の「く」の右傍「シ」。
- 669 「わかなんみなとこきてなん」の上の「ん」見せ消ち、
右傍「も」、「き」と「て」の間、右傍「い」。
- 同 「みるめすらなし」の「ら」見せ消ち、右傍「ク」。
- 670 「さたふん」の上に小丸印、右傍に「平」別筆補記。

同「なきものを」の「もの」見せ消ち、右傍「こひイ」。

676 「ちりならなの」の「ら」の下に小丸印、「ぬ」補入。

677 「はなかつみ」の「か」の左に朱二点注記。

678 「おとにそ」の「お」の右傍「を」。

680 「きみてへは」の「て」見せ消ち、右傍「とい」。

同「わか身を」の「身を」見せ消ち、右傍「恋」。

687 「そめてし」の「し」見せ消ち、右傍「む」。

689 「はしひめ」の右傍「又はたま本（「イ」に重書）」。

690 「いさよひに」に合点、右傍「やすら」、傍書の右に付点（見せ消ち）。

691 「まちてつるかな」の「ち」の下に小丸印、「い」補入。

692 「つけやらん」の「ん」見せ消ち、右傍「は」、「は」に

合点。

694 「露をもみ」の「露」の下に小丸印。「を」補入。

695 「みてしか」の「か」の左に朱一点注記、「やまかつの」

の「か」の左に朱二点注記。

同「かきね」の「ね」見せ消ち、右傍「ほ」。

699 「われ」の「れ」見せ消ち、右傍「かい」。

700 「うら」の「ら」、最初「ち」に誤り「ら」重書（同筆）、

右傍に「占」と注記。

702 「つひに」の「ひ」の右傍「ゐ」、「ひ」「ゐ」ともに見せ

消ち。

703 「たん」の「た」と「ん」の間、左傍「え」、右傍すり消

し跡と墨書の抹消。

同「かへしに」の「に」の右傍「よみて」。

同「たてまつりける」の下に「となん」別筆補記。

705 「家なりける」の「なり」見せ消ち、右傍「にあり」。

同「いま、うてく」の「く」の右傍「く」（別筆）。本行の「く」が「、」に見えるための補記。

706 「女」の上に小丸印、「ある」補入。

同「とまらねは」の「とまらね」見せ消ち、右傍「なりぬ

れ」。

707 「つひに」の「ひ」見せ消ち、右傍「ゐ」。

同「ありてうものを」の「う」見せ消ち、右傍「ふ」。

708 「すまのうらに」の「うらに」見せ消ち、右傍「あまの」、

傍書に合点。

同「風おいたみ」の「お」の右傍「を」。

709 「はふき」の「き」の右傍「木の或」（同筆）、傍書三字

の右傍に付点(見せ消ち)。

同 「みえぬれは」の「みえ」見せ消ち、右傍「なり」。

同 「たえぬこと(マ)」の「こと」の右傍に付点(見せ消ち)、

左傍「こ、ろ」、傍書に合点。

710 「た、こ、にのみ」の「のみ」見せ消ち、右傍「しも」。

711 「色シ」にして「こ」の左に朱一点注記。

714 「そせい」の下に「法し」別筆補記。

717 「わすれなめ」の「わす」見せ消ち、右傍「はな」。

同 「そを」の「を」の右傍「ヲ」。

719 「われをうらんナ」の「ん」見せ消ち、右傍「む」。

722 「そせい」の下に「法し」別筆補記。

同 「そこふかき」の「ふか」見せ消ち、右傍「ひな」。

同 「うはなみ」の「うは」見せ消ち、右傍「あた」。

728 「みをははなれは」の最後の「は」見せ消ち、右傍「ス

歟」(同筆)、傍書に合点。

731 「はるのひの」の「のひ」見せ消ち、右傍「雨」。

同 「ふるひとみれは」の「み」見せ消ち、右傍「な」。

同 「ひちぬる」の「ひち」見せ消ち、右傍「ぬれ」。

732 「わたるらん」の「るら」見せ消ち、右傍「りな」。

733 「わたつみの」の「の」見せ消ち、右傍「と」、「と」に合点。

同 「あはに」の「はに」見せ消ち、右傍「わと」。

734 「むかへに」の「むかへ」見せ消ち、「か」と「へ」の間に小丸印、「し」補入(同筆)、初句右傍書「いにしへに」、傍書に合点。

735 「かりのなくをき、て」の「な」の下「き」補記、「く」見せ消ち、右傍「ける」。

同 「人はしらすや」の「は」「らす」見せ消ち、「らす」の右傍「るらめ」。

736 「ないし」の右傍「典侍」。

737 「こむ院の」次に小丸印、「右の」補入、左傍「能有文徳源氏 右大臣左大将」と注記。

739 「まてとは、」の「と」の下に小丸印、「い」補入。

740 「、ほるのあそん」の右傍「昇延喜八年二月中納言九年民部卿十四年大納言」と注記。

742 「ことつてのなき」の「の」「き」見せ消ち、それぞれ右傍に「も」「し」。

743 「なかめちるらん」の「ち」見せ消ち、右傍「ら」。

744 「あふまでの」の「まで」に合点、右傍「用之」と注記、右傍「こと」、二字合点並びに見せ消ち、左傍「三本合」と注記。

同 「なにかせん」の「かせん」見せ消ち、右傍「せんに」。

746 「あた」の「た」の左に朱二点注記。

747 「こてう」の右傍「五条」。

同 「ほには」の「ほ」の下に小丸印、「い」補入。

同 「はかりになん」の「はかり」見せ消ち。

同 「かくれにけるに」の末尾の「に」見せ消ち。

同 「そこを」の「そ」と「こ」に顛倒符号。

同 「もひいて、」見せ消ち、右傍「恋て三本合」、傍書に

合点。

同 「もとのみにして」の「もとの」に合点、右傍「ヲナシ」、

傍書見せ消ち。

749 「かけすけ」の上の「け」見せ消ち、右傍「ね」。

753 「くまもなく」の「くま」見せ消ち、右傍「雲」。

同 「なきたる」の「な」の左に朱一点注記、「き」の左に朱

二点注記。

同 「あま」の「ま」見せ消ち、右傍「さ」、傍書に合点。

754 「めならふ色」の「色」見せ消ち、右傍「人」、「人」に合点。

同 「わすられにけん」の「にけ」見せ消ち、左傍「ぬら」、傍書に合点。

755 「みたる、」見せ消ち、右傍「なかる、」、傍書に合点。

756 「ぬる、かほ」の「か」の左に朱二点注記。

760 「ふかめて」の「ふ」「か」「め」それぞれ左に朱一点注記。

761 「われそかすかくきみ」の右傍に顛倒を示すと思われる破線あり。左傍「きみかこぬよはわれそかすかく」、傍書に合

点。

764 「こゝろは」の「は」見せ消ち、右傍「も」。

769 「さた」の「さ」の左に朱一点注記、「た」の左に朱二点

注記。

同 「さたの、ほる」の下に割注「貞朝臣登／備中守 仁明

御子」とあり。

同 「なかむるやとの」の「むるやとの」見せ消ち、右傍

「めふるやの」、傍書に合点。

773 「いましはと」の「し」「は」ともに左に朱一点注記。

同「わひしき」の「ひ」の下に小丸印、「に」補入、「き」
見せ消ち。

774 「またる、」見せ消ち、右傍「こひしき」。

778 「すみのへの」の「へ」見せ消ち、右傍「え」。

780 「なりひら」の「り」見せ消ち、右傍「か」。

781 「雲林ゐんのみこ」の左傍「常康親王仁明御子」と注記。

同「のかせをさむ」の「む」の下に小丸印、「み」補入。

783 「おの、さたき」の下に「貞樹」と注記。

784 「おくりける」の「おくり」見せ消ち、右傍「つかはし」。

788 「ことくさそ」の「くさ」見せ消ち、右傍「のは」、傍書

に合点。

789 「ふもとよりのみかへりきぬ」の「よりのみ」「きぬ」見

せ消ち、右傍にそれぞれ「を見てそ」「にし」。

791 「まかりければのちに」の「れはのちに」見せ消ち（「に」

の見せ消ちは誤り）、右傍「るみち」。

793 「たえぬ」の「え」見せ消ち、右傍「え」。本行「ら」に

見えるため傍書で確認せるもの。

795 「もの」見せ消ち、右傍「色イ」。

796 「うたてにくけれ」の「にくけれ」に合点、右傍「かり」、

傍書見せ消ち。

797 「いろみえて」の「て」の左に朱一点注記。

800 「きみかくれなは」の「く」見せ消ち、右傍「か」。

798 「よをうの花と」の「の花」見せ消ち、右傍「くひす」、

傍書に合点。

802 「よみける」の「み」の下に小丸印、「てかき」補入。

803 「うしとて」の「て」の右傍「か」。

804 「つらゆき」の上に「きの」別筆補記。

807 「なをいこ」の右傍「直子」と注記。

同「人は」の「人」見せ消ち、右傍「世を」。

808 「もとよし」の「し」見せ消ち。

同「ひもしかな」の「し」見せ消ち。

809 「た、おん」の右傍「忠臣」と注記。

812 「いとん」見せ消ち、右傍「もはら」。

814 「人そなき」の「人」見せ消ち、右傍「かた」。

818 「まさこを」の「を」見せ消ち、右傍「と」。

819 「かなしも」の「も」に合点、左傍「な」、傍書見せ消ち。

821 「草はの」の「はの」に合点、左傍「きそ」、傍書見せ消

ち。

同 「かはりけり」の末尾の「り」の左傍「る」、傍書見せ消
ち。

同 「山かつら」の「つ」の左に朱二点注記。

824 「よみひとしす」の「し」と「す」の間、右傍「ら」補
入。

同 「よそにそ」の「よそ」に合点、右傍「おと」、傍書右傍
に付点（見せ消ち）。

825 「人もかよはぬ……」に左傍書「又はこなたかなたに人
もかよはず」（同筆、原態）。

826 「あふことを」の「を」の右傍「は」。

828 「よしの、かはの」の「かは」に合点、左傍「タキ」、傍
書見せ消ち。

1073 「しまつ山ふり」の「ま」の右傍「は」、
「は」の左に朱
二点注記。

同 「しつは山」の「つ」と「は」に顛倒符号。

同 「かさしゆく」の「し」見せ消ち、右傍「タ」、
「タ」見
せ消ち、「く」の右傍「い」、
「い」に合点。

1074 「みむろに」の「むろ」の右傍「まゑ」、
「まゑ」に合点。

1076 「人もみるかね」の「か」の左に朱二点注記、
「ね」の右
傍「に」、
「に」に合点。